

## 馬が暮しを支えてくれた

ばんえい競馬が、帯広市で命をつなぐことができるらしい、というニュースを知って、「これで北海道の歴史がひとつ残った」とうれしかった。

この競馬は、もともと北海道の開拓以来ずっと住民の暮しを支えて来てくれた“使役馬”が姿を変えて生まれたものだ。かつて馬は田畑を耕やし、馬車や馬ソリをひいて荷物を運んできた。こうした馬はできるだけ力が強く他の馬よりも多く荷を運べるほど値が高かった。馬の持主は、それぞれ自分の馬の力自慢を競争するのが娯楽のひとつになった。

札幌でも運搬の主役は馬だった。秋は郊外から大根を山積みにした荷馬車が家庭に来て、各家で越冬用の漬物のために大量に買い込んで軒端に干したものだ。その後はすぐに、石炭馬車が家々にストーブ用の石炭を届けに来た。

雪が降ると、車はソリに代わり、荷を積んで町なかを闊歩していたものだ。中でもなつかしいのは正月二日の“初荷”である。雑貨や食料などの小売店へ、問屋から景気良くその年最初の商品が届けられるのだが、馬ソリには紅白の幕が張られ、初荷と大書したのぼりを立て、印半天(しるしばんてん)の男衆が、石油の空きカンを棒でガンガン叩きながら「初荷だ初荷だ」と大声ではやし立てて、馬ソリを走らせていく。いかにも正月らしい、景気つけと宣伝だった。それを引く馬の白い息と首から下げた鈴の音で、馬さえ誇らしげにしているように見えたものだった。

石炭が石油に変わり、馬車がトラックに代わって、あの馬たちはどこへ行ったのだろう。

雪がとけて、春の風が吹くと、札幌の町には、ひと冬の間道路の雪の下で凍っていた馬フンが乾燥し、風に乗って舞った。だから荷馬にオムツをつけさせる市条例が議会で可決された。初代民選市長高田富与さんの頃だ。さほど遠い昔ではない。でも今、札幌の街なかで見かけるのは、観光客をのせる馬車をひく一頭だけになってしまった。